

茨城県菅生沼のワシタカ類 — 10年間の記録 —

上村 孝¹

はじめに

茨城県南西部に位置する菅生沼は、その周辺の環境に大きな開発の手が入ることもなく、数多くの野鳥が観察されている。1985年までに確認された鳥類は、36科163種におよぶ(野田野鳥同好会 1986)。冬期には数千羽の水鳥が越冬し、また、広いヨシ原や周辺の水田・雑木林といった立地条件から、多くの鳥にとって恵まれた環境を残している。これまで鳥に関する記録は、日本野鳥の会の一斉調査以外にもあるが(自然友の会 1972、茨城県 1977)、年間を通した調査は行なわれていなかった。筆者らは1977年より、野田野鳥同好会と東京理科大学のグループによって、水鳥を中心とした定例カウント調査を続けている。水鳥に関する記録は別報に譲るが、本報ではこの10年間のワシタカ類の記録をまとめ、その変遷と菅生沼の位置づけを試みた。

調査地の概要と調査方法

菅生沼は、茨城県南西部の岩井市と水海道市にまたがる猿島台地の谷間に位置している(北緯35°59' 東経139°56')。沼には西仁連川・飯沼川・東仁連川の3河川が流入しており、また、流出は法師度水門によって制御され利根川に注いでいる。南北約5.5km、東西400~450mと細長く、面積は約200haである。菅生沼は北部の上沼と南部の下沼にわかれており、沼内にはヨシ・マコモ・オギ・ヒメガマなどの水生植物が繁茂している。近年、利根川の水位の低下に加えて、繁茂するヨシ・マコモなどとともクロモなどの水草がほとんど利用されなくなったため、その枯死体が堆積し、ますます水深は浅くなり次第に開水面を狭めている(五木田 1977)。夏期には上沼全域と下沼の北西部の水面はヒシで覆いつくされる。上沼の一部と下沼の周辺大部分は、水面から5~10m高い台地となっており、クヌギ・コナラなどからなる雑木林が多くみられる。

調査期間は1979年1月~1988年12月であった。原則として毎月第3週に行なった定点観察法(図1に示したA-Dの地点)による定例カウント調査と著者個人の調査から、総調査回数189回の記録をまとめた。稀少種等に関する情報は野田野鳥同好会に寄せられた記録(野田野鳥同好会 1979-89)を用いた。出現頻度(確認調査回数/総調査回数×100%)は定例カウント調査の記録より算出した。

1989年11月15日受理

1. 〒278 千葉県野田市山崎 2641 東京理科大学応用生物科学科(野田野鳥同好会)



図1. 調査地菅生沼の地図.

Fig. 1. Map of the study area, Sugao-Numa.

結果および考察

10年間で次に示す2科17種類のワシタカ類が記録された.

ワシタカ科: ミサゴ *Pandion haliaetus*, オジロワシ *Haliaeetus albicilla*,
 オオワシ *H. pelagicus*, ハチクマ *Pernis apivorus*, トビ *Milvus migrans*,
 サシバ *Butastur indicus*, ケアシノスリ *Buteo lagopus*, ノスリ *B. buteo*,
 ハイロチュウヒ *Circus cyaneus*, チュウヒ *C. aeruginosus*,
 オオタカ *Accipiter gentilis*, ハイタカ *A. nisus*, ツミ *A. gularis*,
 アカハラダカ *A. soloensis*

ハヤブサ科: ハヤブサ *Falco peregrinus*, チゴハヤブサ *F. subbuteo*,
 チョウゲンボウ *F. tinnunculus*

17種中, 3例以上観察された10種類について図2に示した.

ミサゴは10月を中心とした秋期に毎年みられ, 渡りの途中に立ち寄るものと思われるが, 春期の記録は1例しかなく, 特徴的なパターンを示した. 1979年10, 11月には2個体が,

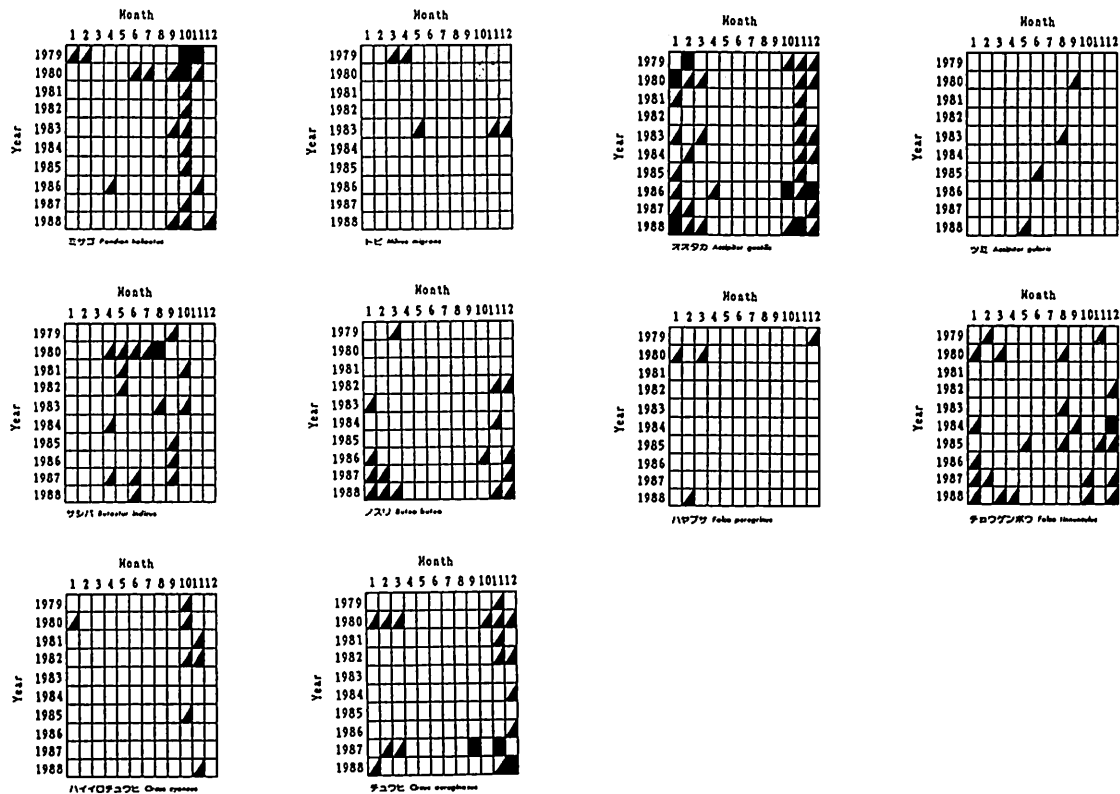


図2. 菅生沼におけるワシタカ類の記録.

1回の調査で出現した個体数の最大値を月別に各マス目に記した。マス目の右下三角で示したのが1個体、四角で示したのが複数個体の確認を表している。複数個体のほとんどが2個体であるが、3個体が2例あった(本文参照)。

Fig. 2. Year and season when raptors were observed in Sugao-Numa.

Triangles and squares indicate a single bird and plural birds, respectively.

1980年10月19日には3個体が同時に観察されたが、以後、複数の観察例はない。近年、ヨシ原が広がり沼全体の陸地化が進んでおり、水面が狭くなったことが減少の理由のひとつと考えられる。1980年6、7月に記録があるが繁殖はしていなかった。

トビは10年間で5例しか記録がない。1979年3、4月と1983年11、12月のトビの記録は、体色や羽の傷み具合からそれぞれ同一個体と思われる。茨城県内では、中北部で広く繁殖し、冬期には内陸の湖沼でも普通にみられる種類であるが（池野 1988）菅生沼では稀少種である。

サシバは主に春秋の渡りの時期にみられた。1980年8月2日に3個体の確認があったが、他はすべて単独個体の観察であり、上空通過がほとんどであった。岩井市と水海道市で巣立ちピナと思われる観察例がそれぞれ1例ずつあった。菅生沼でも繁殖期の観察例はあるものの、近隣地域での営巣の確実な記録はない。関東平野における、サシバの秋の渡りのルートに関してはまだはっきりしておらず（志村 1989）、近年、勢力的に調査が行なわれている。日本野鳥の会茨城県支部の調査結果から、筑波山の東側を南下するコースがあることが解ってきたが（池野 1989）、菅生沼はサシバの主なルートからは外れているものと考えられる。

ノスリは10月から3月の冬期に記録が集中した。菅生沼内だけでなく、主に南側に広がる水田にかけて、広い範囲を行き来する様子がよく観察された。本種の記録は近年になって非常に増加している。冬期のノスリの餌は主にネズミ類であることが知られているが（前田 1986）、沼内のヨシ原拡大によって、餌場として適した環境が広がったことに依存しているものと考えられる。

ハイロチュウヒは主に10月下旬から11月上旬にかけて、渡りの途中に立ち寄るものと思われ、5～10日ほどで姿を消す。その間、沼の内部を周回する行動がみられ、周辺の水田などに出ることはほとんどない。記録はすべて♀であった。

チュウヒは冬期に記録が多く、ハイロチュウヒ同様、沼の外部に出ることは少ない。近年、同時に2個体観察された例が増えており、ヨシ原を好むチュウヒにとっても適した環境を呈している。

冬期の菅生沼でもっとも普通にみられるのがオオタカであり、2個体以上が同時に観察されることも珍しくない。同じシーズン中でも、♂タイプ・♀タイプ・幼鳥タイプがそれぞれみられ、冬期においても、沼の内外で個体の出入りがあるものと思われる。

ツミとハヤブサは、10年間でそれぞれ4例しか記録がない。ハヤブサの記録は1980年以降長いあいだ途切れていたが、1988年2月13日に久しぶりに記録された。両種ともに、菅生沼では稀少種である。

チョウゲンボウは一年を通して記録された。繁殖期の記録もあるが、近隣地域での繁殖は確認されていない。冬期における記録は近年増加の傾向を示しており、出現頻度も冬期が最も高い値を示す。主に、菅生沼を越冬地として利用している。

これら10種からトビ・ツミ・ハヤブサを除いた7種のうち、ミサゴ・サシバ・ハイロチュウヒの3種は渡りの通過コースとして、ノスリ・チュウヒ・オオタカ・チョウゲンボウの4種は主に越冬地域として、それぞれ菅生沼を利用していた。出現頻度の高い種類を順にあげると、オオタカ（19.2%）>チュウヒ（9.2%）>ミサゴ（8.3%）>サシバ（6.7%）>チョウゲンボウ（5.8%）>ノスリ（4.2%）となり、オオタカの出現頻度が際だっ

て高かった。チュウヒ・チョウゲンボウ・ノスリの記録は、近年、増加の傾向を示している、特にノスリは年を追って顕著に増加している。このように冬期に観察されるワシタカ類は種類・数ともに多く、菅生沼は越冬地としての性格が強いことがうかがわれる。

図2に示した10種以外はいずれも10年間で1,2回の記録しかなく、菅生沼では至って稀な種類であった。以下、その記録を記す。

ハチクマ：1979年7月15日,	オジロワシ：1987年2月8日,
オオワシ：1988年2月12, 13日,	アカハラダカ：1983年8月27日,
ハイタカ：1980年2月3日, 1983年3月20日,	ケアシノスリ：1981年5月23日,
チゴハヤブサ：1980年2月3日	

県内でも、ケアシノスリはきわめて稀であり、また、識別が困難なことから見落とされていた可能性が高いが、アカハラダカは菅生沼が県内初記録であった。

茨城県下でこれまでに、22種類のワシタカ類が記録されている(池野 1988)。このうち菅生沼で記録がないのは、山地性の種類か、もしくはきわめて珍しい迷鳥だけである。このことから、菅生沼はワシタカ類にとって恵まれた環境を有していると考えられる。また、県内では比較的普通種であるハチクマ・トビ・ハヤブサといった種類が少ないことは菅生沼の特徴である。種類数・個体数・出現頻度ともに冬期において最大となり、越冬地として利用するワシタカ類は多く、沼への依存度は高い。現在の環境が未永く保護されることを期待する。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、山崎勉・北城昭夫・北城道夫・三輪和久・五十嵐浩の各氏をはじめとした野田野鳥同好会、および、東京理科大学野鳥クラブの方々から多大の助言と御協力を頂いた。望月和男・広井忠量の両氏からは貴重な記録を、水海道市役所の染谷米三・加倉田謙二の両氏からは文献・資料を、自然友の会の五木田悦郎氏からは菅生沼の環境全般にわたる情報を頂いた。以上の方々に対し厚く御礼申し上げる。

要 約

1979～1988年10年間の、茨城県菅生沼におけるワシタカ類の調査を行なった。2科17種が確認されたが、繁殖している種類はいなかった。アカハラダカが県内ではじめて記録された。出現頻度は、オオタカ・チュウヒ・ミサゴ・サシバ・チョウゲンボウ・ノスリの順に高かった。オオタカは他種に比べて、特に高い出現頻度(19.2%)を示し、また、ノスリの記録は近年増加していた。種類・個体数ともに冬期に多く観察され、ワシタカ類の越冬における当地の重要性が示唆された。

引用文献

- 五木田悦郎. 1977. 茨城県の自然. 暁印書館, 茨城.
 茨城県. 1977. 鳥類相. 菅生沼自然環境総合調査報告書. pp. 69-74.
 池野 進. 1988. 茨城のワシタカ. ひばり 161: 22-25.
 池野 進. 1989. ワシタカ調査結果. ひばり 168: 22-25.
 前田崇雄. 1986. 冬の猛禽観察. 野鳥 473: 14-17.
 野田野鳥同好会. 1978～1989. ざおうぬま No. 34～No. 127.

野田野鳥同好会. 1986. 清水公園座生沼の四季. 109.

志村英雄. 1989. ワシタカの渡り. ほおじろ 101:3-6.

自然友の会. 1972. 菅生沼付近の鳥類. 岩井市およびその近郊における動植物調査報告. pp. 38-44.

A one-decade raptor survey in Sugao-Numa, Ibaraki prefecture

Takashi Uemura¹

Raptors were surveyed from 1979 to 1988 in Sugao-Numa, Ibaraki Prefecture. Seventeen species of raptors (2 families) were recorded. No species were observed to breed in this area. One Chinese Sparrow Hawk *Accipiter soloensis* was observed on 27 August 1983. This is the first record for this species in Ibaraki Prefecture. Species at high frequency were, in order of the occurrence rates, Goshawk *Accipiter gentilis*, Marsh Harrier *Circus aeruginosus*, Osprey *Pandion haliaetus*, Gray-faced Buzzard-Eagle *Butastur indicus*, Kestrel *Falco tinnunculus*, Buzzard *Buteo buteo*. Goshawks were frequently recorded (19.2 %) in winter, and overwintering Buzzards increased greatly in recent years.

This area should be preserved as overwintering sites for many raptors.

1. Department of Applied Biological Science, Science University of Tokyo, Noda, Chiba 278, Japan.